

# たまいたさ

## 川柳



夕景

### 巻頭言

西部劇とくにんじゅ

願法みつる

今、アメリカ映画での活劇物と言えば、戦争や宇宙や未来物が多い。かつては西部劇が盛んな時代があった。のめり込んだ日本男性は、戦後の若者であり団塊の時代よりも古い。洋物への憧れも強かった時代である。少し遅れて流行った日本映画の時代劇や任侠物とも国民性が似通っていたかも知れない。家族関係や友情に温もりがあり、正義を貫く孤高の男臭さが何とも魅力だった。

時代劇からリメイクされた西部劇が目立つところにも共通性を感じ取れる。また、大根役者と言われたゲイリー・クーパーや三船敏郎が、その後、大スターになった流れにも、映画人の共通性を感じるのには筆者だけだろうか。

サテここで言いたいことは、映画「真昼の決闘」における国民性についてである。西部劇は、基本的には勧善懲悪であり、市民は善の側なのだ。しかしこの映画では、クーパー演じる保安官が悪と対峙するとき、市民は関わりを逃避したのだ。結果、映画のラストで、悪を倒した保安官が、市民には挨拶も交わさずに去ってゆく。

市民が正義に与しないなど、国民性からは受け入れられない米国でありながら、この映画は正当に評価され、アカデミー賞西部門を獲得した。近年のアメリカ的国民性を見るような気がするのだが、穿ちすぎだろうか。

### 日日是好

願法みつる

釜茹での蛸悔いているマイホーム

世の憂さへ亀は尻を放る波一つ

地球儀が柘榴のように裂けている

放射能一杯吸って翔ぶアトム

勝てば官軍ロボットのイクサビト

ロケットの無事の発射へ月見酒

城跡がこんなにもありおらが国

右顧左眈しない老舗の心柱

年金を犬に食わせている孤独

(七月号中「考えた未悪いのは蛇だろう」は削除します。)

平成27年

8月号 (No.669)

日川協加盟